

鉢かづき姫の変貌

右田久子

序

御伽草子「鉢かづき」は、継母に家を追い出された娘が、鉢をかぶった姿でさまよっていたが、ある御曹子に見そめられて結婚し幸せを得る内容の物語である。鉢かづきという不幸な姿から幸せを得る女性へと変化することに特徴がある。この幸不幸の変化は鉢の有無によって区別されており、鉢の役割の大きさを示すものと見ることができた。

ところで近世、この「鉢かづき」を素材とする「鉢かづき」ものが多く生まれている。その中では鉢の有無があまり問題にされていない。鉢の役割が減退し、変わって鉢かづき姫という女性像の特徴を描くことに「鉢かづき」の中心があるようなのだ。鉢かづき姫と鉢の描き方がどのように変化し、近世なりの「鉢かづき」受容へとつながっていったのだろうか。その点を御伽草子から時代を追って近世の「鉢かづき」ものを見ていく中で考えていくことにする。

第一章 鉢かづき姫と鉢の関係

第一節 御伽草子の鉢かづき姫と鉢^(注)

最初に鉢かづきという姿の意味を明らかにしたい。鉢かづきという姿を作ったのは鉢かづき姫の母であった。

姫の両親について、「明け暮れ観音を信じ申されけるほどに長谷の観音に参りては、かの姫君の末繁昌の果報あらせ給へとぞ祈り給ふ。」と説明があり、母の観音に対する深い信頼が分かる。姫の母はこのような人物なのだ。

その母が姫に鉢をかぶせる状況を見てみよう。この時母は死期の近づいていることを悟り、姫に対して「あらむざんやな、十七八にもなし、いかなる縁にもつけおき、心安く見おき、とにもかくにもならずして、いとけなき有様を捨ておかんこと、あさましさよ」と嘆く。そして姫に鉢をかぶせて「さしも草深くぞ頼む観音誓ひのままにいただかせぬ」という歌を詠んだのだ。姫が幸せになるまで

育ててやれないから、観音を頼みに鉢をかぶせようということになる。母の言動から、鉢には姫の幸せを導いてくれるように観音への願いが込められていたことは明らかだ。

母から見ると鉢かづきとは観音の保護の約束された姿であって、鉢を幸運の象徴のようにも捉えることができた。

だが一方では鉢を不幸の原因と見る考えもある。鉢かづき姫がそうで、「片端のつきぬることの怨めしきよ」とという言葉がそれを表している。

姫と姫の母とで鉢かづきの捉え方は正反対なのだった。

ここで注目したいのは、母は観音を信仰し鉢に観音像を意識していたが、姫の方はそうではなかったということだ。

姫が観音信仰に気付くのは鉢が外れた時である。その場面では、鉢が外れ中から宝物が現われたのを見て姫は、「わが母親音を信じ給ひし御利生」と悟っている。つまり鉢かづきの姿に意味があったと理解し観音のありがたみを自覚したと言える。

姫が家を追い出されて入水した時、鉢のおかげで体が沈まず命が助かったりしている。このことなども鉢を通して観音の力が働いたという見方ができる。しかし逆に姫は「などふたたびは浮きあがりけん」と命が助かったことも不幸のように感じていた。鉢かづきの状態の時はこの例のように鉢は迷惑なものとして描かれていたのである。

鉢が自然に外れ宝物を生じさせるといふ変化が、姫に初めて幸せを実感させてくれたのだ。その幸せを感じた中に観音へのありがたみが含まれている。鉢の変化が姫に宝物をもたらす幸せと同時に信仰へと導いていたと言えた。

御伽草子「鉢かづき」の末尾に、「この物語を聞く人は、つねに観音の名号を十返つ御唱へあるべきものなり。」という言葉がある。要するに御伽草子「鉢かづき」は観音信仰を勧めているのだ。観音のありがたみは、観音信仰に無関心だった鉢かづき姫でも母の信仰心のおかげで幸せへ導かれていたことで証明されている。

鉢かづき姫の観音信仰への無関心は、鉢かづきという不幸の時期と重ねられていた。その間は姫は助けられていたことに気付いてないので不幸しか感じない。逆に幸せな時期は鉢が外れ姫が観音のありがたさを知ってからである。鉢の有無は鉢かづき姫の観音信仰への態度の違いを分けていることが分かる。

だから鉢かづき姫に訪れる変化も、観音信仰について無関心な時期から信仰への理解へ移っていることを、不幸から幸せへの逆転と重ねて表現したかったのだと言える。

このように御伽草子では観音信仰を説くことが中心で、鉢が「鉢かづき」の中心的な役割を果たしていたのだ。

第二節 赤本の鉢かづき姫と鉢

御伽草子「鉢かづき」を絵本化して次に現れてきたのが赤本「はちかつきひめ」である。赤本の内容は御伽草子と同じなので、鉢かづき姫と鉢の描き方に差はないはずだった。

しかし赤本の鉢かづき姫と鉢には御伽草子と異なる印象をもった。赤本というものの特徴に子どもを意識していることが挙げられる。子ども向きにする工夫に、理解しやすくすることや表現を和らげるということが考えられるが、その結果鉢かづき姫と鉢の印象にも影響が出てくると考えられる。

では鉢かづき姫の方からその印象の変化を見てみる。鉢かづき姫は鉢によって人間らしく見えない姿で描かれるものである。だが赤本では頭の鉢を除けば娘らしい姿で描かれていた。鉢かづき姫が宰相の君と出会う場面に特に注目したい。この場面では姫は辛い仕事に嘆いてもいて、宰相(注三)の君との恋はあっても決して明るくは描かれていなかった。赤本で同じ場面を見ると、姫は不幸にあるとは見えない。恋をしている女性と印象される。

御伽草子では、「その時、いとど恥づかしさは、やるかたもなし。わが人のやうにもあらばこそ（中略）あるにかひなき有様にて、見えぬることの恥づかしさよ」と姫の気

持ちを説明している。普通の姿ならともかく鉢かづきの生きているかいない姿で、宰相の君と逢ってしまったのは恥づかしいと嘆いているのだ。鉢かづきという重荷が、恋という喜びも不幸の思いを強めるだけであったことが分かる。

このように同じ場面を比べると、赤本では鉢かづきということで鉢かづき姫に不幸なイメージだけを押つけていない。赤本の鉢かづき姫は鉢かづきは不幸な姿というイメージだけに縛られない、普通の女の子として見られていたのだ。

鉢かづきということが強く印象されなくなっている原因に、観音信仰をあまり強調しなくなっていることが挙げられる。

鉢が外れる場面を赤本で見よう。この場面は観音のありがたみを印象させる鉢にとっての見せ場であった。だが赤本の中には観音に関連した言葉は見つからない。しかも鉢の中から生じた宝物も観音とは無関係だ。宝物については、「姫の母が」手箱より様々の宝物出だし姫の頭に置きその上に鉢を被せ」と書かれているからである。赤本での鉢は観音信仰が強調されなくなったことで、その役割の意味は失われていったのだ。

赤本から観音信仰という宗教色が薄れていったことで、

「鉢かづき」は幸せを得る女の子の姿を描く方が中心のように理解されていたと思われる。赤本の鉢かづき姫は鉢の有無で不幸を区別されているというより、様々な経験をしながら結婚という幸せを得ていく姿として見る事ができるからである。

赤本ではこのように御伽草子とは違う印象の鉢かづき姫と鉢になつていた。そのように見えるのは省略や絵の影響からきていることなので、赤本で特別に鉢かづき姫と鉢の描き方を工夫したこととは言えない。だから御伽草子の観音信仰を強調した内容での鉢かづき姫と鉢から発展したとは断言できない。

だが以後の「鉢かづき」もので鉢かづき姫という女性を描くことが中心になつていくことから、赤本のような鉢かづき姫中心の「鉢かづき」の流れが生まれつつあったと考えられよう。近世の「鉢かづき」の捉え方は、鉢の有無で示される変化より鉢かづき姫像の特徴を描く傾向にあったという、御伽草子からの発展を予想させるものとして赤本を評価できる。

では次の黒本・青本期以降の「鉢かづき」ではどのような鉢かづき姫の登場があつたのか見ていきたい。その中で本来の役割から離れていく鉢の描き方についても考えていくことにする。

第二章 新しい鉢かづき姫

第一節 黒本・青本期の鉢かづき姫

―「鉢かづき嫩振袖」を例に―

始めに黒本・青本「鉢かづき嫩振袖」(以下「嫩振袖」と略称)の内容を説明しておく。^(五五)

水玉という家宝を所有し、そのおかげで繁栄をきわめる山蔭長者には、初花姫という一人娘がいる。姫には月道親王という恋人がいる。ところが姫を妃に望む雲間の王子は、姫の継母と共に謀し姫を手に入れ水玉をも奪おうとしていた。長者が殺され水玉が奪われる事件が起こる。この騒ぎの中で王子を拒み続けた姫は王子に殺され、その責めを負つて忠臣宮内は追放されてしまう。その後、鉢をかぶつた美しい娘が出現する。この娘を見かけた女郎屋南左衛門は連れ帰つて求婚するのだが、娘は応じない。そこで辛い仕事に使い、南左衛門は娘の気持ちを变えさせようとしていた。そこへ水玉を探して宮内を訪れてくる。ここで宮内は水玉を発見し、南左衛門も実は味方の一人と知る。そして水玉の力で鉢かづきの鉢が外れ、その中の手紙からこの娘が真の初花姫であると分かつたのだ。騒ぎの因の雲間の王子一味は宮内達によって滅ぼされ、本物の初花姫は月道親王と結ばれ、宮内も山蔭の家を預り双方めでたく栄える。

第二節 黄表紙の鉢かづき姫

―「八被般若角文字」を例に―

さて、鉢かづき姫と言うと不幸を体験する女性ということで、非力なイメージで描かれていたものだった。次に挙げる黄表紙「八被般若角文字」（以下「般若角文字」と略称）では、その定着したイメージと違う鉢かづき姫像を作りだしている。そのあらずじを簡単に説明しておこう。

ある長者の一人娘が戯れで父からかぶせられた鉢が離れなくなり、鉢かづき姫と呼ばれることになる。その後継母には家を追い出され悲しんで入水した。しかしそこへ通りかかった古道具屋四郎兵衛が、高価そうな鉢に目をつけ拾い上げ、一緒に引き上げられた鉢かづき姫は四郎兵衛の世話になることにする。四郎兵衛は姫が美しいので両国見世に出したところ大評判となった。こうして姫は順調に過ごしていたのだが、ある時介間見た男女の恋に急に嫉妬を覚え、そのために鉢に三本の角まで生えてくる。姫はこれを悲しみ自分を呪い、更に修業の旅へ出ていく。その旅から姫は戻ったところで四郎兵衛とぶつかったことで、鉢も角も外れる。姫も四郎兵衛も喜び後に姫は結婚し、四郎兵衛も姫のおかげで安楽に過ごした。

この内容から鉢かづき姫が鉢かづきということで特に不利益を受けているとは見えない。両国見世で評判を得て金

もうけをしていることでそれは分かる。鉢かづきという姿が変わっていることに違いはないが、だからと言って不幸になると決まっていはいない。鉢かづきとして普通の人とは別の生き方と悟ってしまえば嘆くことはないのだ。ここで鉢かづき姫は変わった生き方として鉢かづきという体験をした女性なのである。

では次に鉢かづきとして姫がどのように生きたか、元通りの姿となる経過についても具体的に考えてみる。

まず鉢かづきとなった説明は、「寵愛のあまり戯れに、酒の肴を入れし南京の鉢を被せける」とある。姫の父が娘かわいさについて意味のないことをしてしまっただけであつた。鉢かづきとなる背景には、母の死など不幸を予想させる状況が付きまどっていたものだが、そうした状況とは無縁だと分かる。

鉢かづきとなる背景の不幸な状況は、鉢かづき姫のこれからの苦勞を予想させている。「般若角文字」では鉢かづきとして生きることを苦勞という暗いイメージから切り離して考えていたのではないだろうか。

姫は鉢かづきという姿のおかしさを気にして、継母から追い出されたこともあって悲しんで入水している。しかしこの姿を弄見した四郎兵衛はあまり奇妙さを感じていなかった。鉢かづきというものが特におかしく見られていないの

は、暗いイメージから離れていることを示している。

四郎兵衛によると鉢かづき姫との出会いは、「結構なる鉢があると思ひ、拾い上げんとしければ、美しき娘ゆへ、何にもせよ（中略）よつぼどの値打」となる。「よつぼどの値打」の鉢と「美しき娘」の姫と四郎兵衛は見ている。鉢かづきというものの新しい見方と言えた。

この新しい見方は鉢かづきとしての生き方が決して不幸ではないことを意味する。だから両国見世で鉢かづきとして成功したのだ。「姫が所作事いよいよ評判強く、ことに珍らしきものなり」とあり、鉢かづきというもののへの好意的な関心の高さが分かる。鉢かづきとして生きることがは姫にとって不都合とは言えないだろう。

だが鉢かづきとしての生き方が、姫にとって本当に満足できるものでなかったことが、男女の恋への嫉妬という形で明らかにされる。鉢かづき姫は高い評判は得ていたが恋は得たことがない。だからこの嫉妬は姫が自分に欠けるものに気付かされたということの意味する。

本来鉢かづき姫という女性は、姫を見もめる男性の登場によって幸せへ転じていくことになるものだった。だが「般若角文字」では結末の結婚に至らないと、姫を恋の相手とする男性の登場はない。このことも鉢かづきそのままでは、恋には不相当ということを表していたと見ることで

きる。

「三本の角、鉢を貫きて生へ、ほんまの蛇身となりければ」というのが姫の嫉妬の様子を描いたものだ。この姿の恐ろしさからも姫にとって恋がいかに望まれていたか分かる。嫉妬を表す角は「鉢を貫きて」とあるから、鉢かづきということ以上に、恋のないことの方が姫にとっての不幸を指していたと思われる。

恋の有無を姫が重視していたことは次の場面でも明らかに。「鉢の離れぬでさへ束縛なるに、又その上に、三本の角生へければ、いよく我身の罪深き事を嘆き」、「罪を滅しんため」姫が修業の旅へと出るところである。

鉢かづき姫の「罪を滅しんため」の行為は角の件が初めてではない。鉢かづきの姿で入水して、その後救われて両国見世へ出たのは、「罪を滅しんため」だったとある。だが両国見世から更に角を生やすという「罪」を作っており、姫が本当に「我身の罪深き事」を悟っていなかったからだと見える。「罪」への意識は姫の不幸を表していることと見ることが出来る。角の件では修業に出る程の深い「罪」への意識があることから、恋の有無が姫の幸不幸を左右する位の影響力をもっていたと考えられるのだ。

修業の結果鉢も角も外れて、姫も四郎兵衛も喜ぶ。姫が後に結婚して幸せになる一方で、四郎兵衛は、三本の角が

付いて鉢が「いよいよ値打があり」と「金儲けをした上に安楽に過ぎれ」と幸運にありついていた。こうして誰にとってもいい結末で、「般若角文字」は終わる。

鉢かづき姫を本当の幸せへ導いていたものは何だろうか。姫の本当の幸せは結末の結婚とすると、結婚を可能にするためには鉢や角は除かれなくてはならない。そうすると姫の修業がなくては鉢や角は外れなかったのだから、修業のきっかけとなった角の件を重く見るべきである。つまり角が生えたことが姫の幸せへ関わってくると言えた。

角とは姫の一種の不幸の思いを表していた。そのことは高い評判という表面上の良さに隠されていた。角という形で姫が不幸を自覚する変化が、「般若角文字」での「鉢かづき」ものとしての変化だったのだ。

本来の鉢かづき姫の恋は、男性の登場によって与えられるものだった。「般若角文字」ではそうではなかった。恋への嫉妬は恋を求める姫の心でもある。そしてそのような自覚のために、鉢かづきとなる変わった運命がきっかけになっていた。

「般若角文字」の鉢かづき姫の心の動きを見てみると、鉢かづきという姿を除けば、普通の女性でも見られそうな感情と言える。だから女性の心の動きを表すことが鉢かづき姫の描写に託されていたと見ることができる。鉢かづき

というものはその中で内容をよりおもしろくするものなのだ。鉢かづきのイメージは不幸という暗さから離れ、しかも女性としての感情の変化を示す鉢かづき姫像は、新しい「鉢かづき」ものを生んだと言える。

結び

以上のことから近世の「鉢かづき」ものにおいて鉢の有無による変化より、鉢かづき姫像をどのように見せるかに関心が移っていると分かった。

こうした関心の変化は、女性への関心とも結び付けることができる。というのは変化というものが女性としての性格を中心に考えられていたからである。

赤本では結婚に至るまで少女から大人の女性への成長の変化であった。「嫩振袖」では本当の初花姫が明かされていく変化、「般若角文字」では女性の感情の変化とできる。それぞれ女性としての運命を踏まえた鉢かづき姫像を創っている。

一度不幸を体験し幸せな結婚をするという生き方以外は鉢かづき姫はしない。だが新しい生き方はなくとも、様々な姿の鉢かづき姫像を見ることができた。一つの鉢かづき姫像からその様々な見方の女性像が考えられるほどに、鉢かづき姫は変わっていったのである。

注

注一 『日本古典文学全集三十六 御伽草子』大島建彦校注（小学館 昭和四九）所収「鉢かづき」をテキストとして使用。

注二 『江戸の絵本―初期草双紙集成―Ⅲ』小池正胤・叢の会編（国書刊行会 昭和六三）に所収。この作品は青本「鉢冠姫物語」とも分類され、後に「鉢被姫物語」という名で再版されている。

注三



なおこの場面について注二のテキスト二〇四ページの注に濡れ場のイメージが強いとの指摘がある。

注四 この場面からは姫の「わが母観音を信じ給ひし御利生」という台詞が省略されている。

注五 注三のテキストに同じく所収。黄表紙「鉢冠水曲玉」という名で再版もある。他の黒本・青本の作品として「新鉢かづき姫」「源平鉢かづき姫」「鉢かづき姫物語」などが見られる。本論で用いた作品は閲覧可能で「鉢かづき」に近いと評価されていることから採用した。

注六 『山東京傳全集 第一巻 黄表紙一』水野稔編（ペリかん社 一九九二）に所収。他の黄表紙作品に「鉢冠水曲玉」（注五参照）「鉢冠物語」「復焼直鉢冠媛 稗史億説年代記」などがある。「鉢冠水曲玉」以外は全て閲覧できたが、本論で用いた作品に最も新しさを見出せたのでこれを採用した。